



シンポジウム 岡崎市歴史まちづくり

東海道を舞台にした信仰・祭礼等に見る
歴史的な風情を磨く

記 録 集



－ 目 次 －

2 頁	開催主旨
2 頁	プログラム
3 頁	出演者プロフィール
6 頁	開幕あいさつ
7 頁	第 1 部 活動紹介
13 頁	第 2 部 基調講演
25 頁	第 3 部 パネルディスカッション
37 頁	アンケート集計結果
41 頁	参考資料

－ 開 催 概 要 －

日 時	平成 30 年 1 月 21 日 (日) 13 時 30 分～16 時 00 分
場 所	岡崎市図書館交流プラザ・りぶらホール
主 催	岡崎市都市整備部まちづくりデザイン課 教育委員会事務局社会教育課

開催主旨

古より交通の要衝となってきた東海道沿いには、松並木や常夜燈、歴史的建造物や宿場のまちなみが当時の面影を残し、地域の人々に受け継がれてきた信仰や祭礼等が歴史と伝統を今に伝えています。

岡崎市を代表するこの歴史的風致を市民一人ひとりが再認識し、一層の誇りと愛着を持って継承できるよう、また、美しく風格ある岡崎を創生し、訪れる人々に感動を与えられるようなまちづくりを行うことで地域の活性化や観光振興につなげていけるよう、「岡崎市歴史的風致維持向上計画」において2つ目の歴史的風致である「東海道を舞台にした信仰・祭礼等にも歴史的風致」の維持向上を目的としてシンポジウムを開催しました。



プログラム

13:30	開 幕	(山中八幡宮のデデンガッサリ)
13:50	第1部	活動紹介 歴史と伝統を反映した活動の継承 矢作神社の祭礼 津島神社の天王祭り 本宿神明社の祇園祭 藤川町十王堂の修景
14:10	第2部	基調講演 歴史的建造物が地域を活性化させる 講師：後藤 治
15:00	休 憩	
15:10	第3部	パネルディスカッション 東海道に伝わる歴史文化資産を活かしたまちづくりの新たな展開 テーマ①「歴史文化資産の持続可能な継承」 テーマ②「歴史文化資産を活かした地域活性化と観光振興」 コーディネーター：瀬口 哲夫 パネリスト：後藤 治、野本 欽也、内田 康宏
16:00	閉 幕	

出演者プロフィール

基調講演講師・パネルディスカッションパネリスト

後藤 治

工学院大学建築学部 建築デザイン学科 教授
同大理事長



略歴

1960 年生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、東京大学大学院工学系研究科を経て、1988 年文化庁文化財保護部建造物課文部技官、同文化財調査官。1999 年に工学院大学工学部建築都市デザイン学科助教授、2005 年同教授。2017 年から現職。専門は歴史的建造物及び町並みの保存修復、歴史的建造物の保存に関わる制度、伝統的な木造建築の構法・技術。一級建築士。博士（工学）。

委員等

全国ヘリテージマネージャーネットワーク協議会運営委員長、歴史的建築物活用ネットワーク HARNET 共同代表。その他、日本建築学会、建築史学会の委員ほか多数を歴任。

著書等

『伝統を今のかたちに 都市と地域再生の切り札！』『都市の記憶を失う前に 建築保存待ったなし！』など著書多数。

パネルディスカッションコーディネーター

瀬口 哲夫

岡崎市歴史まちづくり協議会会長

岡崎市景観審議会 会長

岡崎城跡整備委員会 委員長

名古屋市立大学名誉教授



パネルディスカッションパネリスト

野本 欽也

岡崎市歴史まちづくり協議会 委員

岡崎市文化財保護審議会 委員



パネルディスカッションパネリスト

内田 康宏

岡崎市長



オープニング（山中八幡宮のデンデンガッサリ）

デンデンガッサリ保存会による市指定無形民俗文化財「デンデンガッサリ」の奉納演技



開幕あいさつ

岡崎市長 内田 康宏



皆さん、こんにちは。岡崎市長の内田康宏でございます。

まずは、山中八幡宮デンデンガッサリ保存会の皆さま、ありがとうございました。室町時代から伝わるこのお田植え神事は、13 年前の愛・地球博でも披露された岡崎が誇る伝統的な祭りの一つでありまして、保存会の皆さま方のご努力によりまして、今日まで大切に受け継がれているわけでございます。本日、保存会の皆さま方の熱意を肌で感じ取ることができまして、文化の伝承ということの偉大さを改めて感じたところであります。

さて、本市では、地域の歴史文化資産を活かしたまちづくりを積極的に進めております。その取り組みの一つとして、本日この歴史まちづくりシンポジウムを開催いたしましたところ、多くの皆さま方に来場いただきまして、厚く御礼申し上げます。

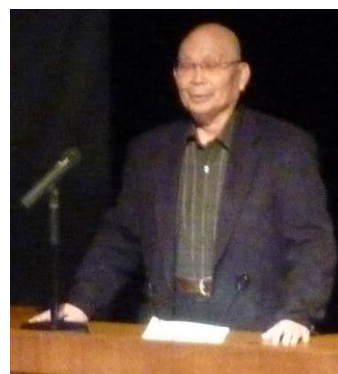
1601 年、徳川家康公によりまして宿^{しゆくえき}駅制度が定められ、東海道は江戸と京を結ぶ日本の大動脈となりました。この東海道を通じて人や物、情報が行き交い、文化の交流が盛んに行われ、各地に固有の祭りが生まれ、本市の歴史文化も育まれてきたところであります。

本日のシンポジウムにおきましては、東海道を舞台にした信仰や祭礼等にもみる歴史的な風情を磨くためのまちづくりにつきまして、皆さま方と一緒に考えてまいりたいと思っております。第 1 部では、矢作神社の祭礼、津島神社の天王祭り、本宿神明社の祇園^{ぎおん}祭、藤川町十王堂の修景につきまして、歴史と文化を反映した活動の継承についてご発表いただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。第 2 部では、平成 11 年まで文化庁の文化財の調査官を務めるなど、これまでに多くの歴史的建造物の保存修復や保全活用の制度設計の検討を手掛けられ、全国の歴史的景観の保全事例に精通しておられます工学院大学教授の後藤治先生をお招きしまして、「歴史的建造物が地域を活性化させる」と題しましてご講演をいただきます。大変興味深いお話を聞かせていただけるものと楽しみにしておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。そして第 3 部のパネルディスカッションでは、私も参加させていただきまして、後藤治先生、本市の歴史まちづくり協議会の委員をお願いしております野本欽也様、そして同協議会の会長を務めていただいております瀬口哲夫先生との 4 名で、「東海道に伝わる歴史文化資産を活かしたまちづくりの新たな展開」につきまして考えていきたいと思っております。

本日のシンポジウムを契機に、本市の歴史まちづくりへの関心や機運が一層高まり、地域の活性化や観光振興につながることを期待申し上げまして開会の挨拶とさせていただきます。本日は最後までどうぞよろしくお願いいたします。

第1部 活動紹介「歴史と伝統を反映した活動の継承」

矢作町三区山車保存会 顧問 鋤柄 欣宥氏



矢作神社の祭礼

ただいまご紹介にあずかりました矢作町三区山車保存会の鋤柄欣宥と申します。矢作神社の祭礼と山車についてご紹介させていただきます。

矢作神社に祀^{まつ}られている神様は、通称牛頭天王^{ごずてんのう}と言われる素盞鳴命^{すさのおのみこと}で、町民は親しみを込めて天王さんと呼んできております。素盞鳴命は天照大神の弟^{おとうとがみ}神で、邪気を払い、悪事・災難を払い除いてくださる神様で、京都祇園祭で有名な八坂神社も同じ神様です。

祭礼には、山車の引き回しが行われます。祭礼は、10月1日、2日ですが、山車は第一土曜日に引き出されます。ここで実際に山車が引かれていく動画をご覧ください。正面には唐破風^{からばふう}と呼ばれる反り曲がった曲線の屋根を二重に設え、これにいろいろな彫刻をはめて金箔を押して荘厳華麗な山車に仕立てられております。また山車の三方には、猩々^{しょうじょう}、獒々^ひ、緋色の幕を垂れ、その上に黒地に金や銀の糸で龍が刺繍^{ししゅう}された水引^{みずひき}が付けてあります。町引きの際には、龍が飛び跳ねているように見える壮大さであります。

矢作町は昔、街道沿いに4つの町に分かれておりましたが、それぞれに山車がありました。祭礼前日には町内総出で山車を仕組み、当日は町引きを競ったものでありましたが、残念ながら2つの山車は故あって手放されてしまいまして、現在は二区と三区の山車の2台になってしまいました。この2台は、岡崎市の有形民俗文化財に指定され、町民も代々これを大切に守ってきました。

山車は、旧東海道沿いに、町内の安全無事、町民の無病息災を祈念しながら巡行します。町引きの最大の見どころは、神社から堤防道路へ上がる急な坂道がありますが、そこを人と車が一体となって駆け上がる様であります。また、角々では、立ち切りと言いまして、山車を立てて方向転換をする見せ場もあり、また要所要所では、稚児の舞の奉納が艶やかさを見せてくれます。また夕闇が迫る頃になりますと、提灯に灯りをともして山車蔵の前にひっそりと佇む山車の風情は、屋間の荒々しさとは反して、静かな平穏無事な姿を見せ

活動の継承のために



矢作二区・三区の山車が揃い踏み

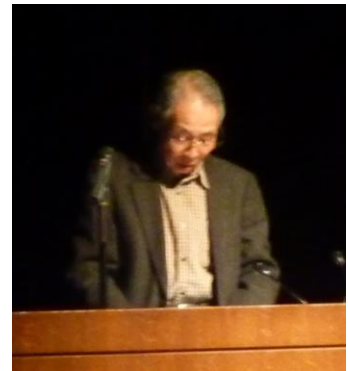
てくれます。

この山車は、江戸末期の 1839 年、岡崎城下大黒町の^{おおやまそうはちろう}大山惣八郎を棟梁に、彫刻は名古屋の^し瀬川治助^{すけしげさだ}重定が担当し、木材で山車の飾りを作る^{きじや}木地屋、それからそれに金箔を貼る^{はくおきし}箔置師等、岡崎の職人衆が一丸となって作り上げたものです。しかし、建造から 180 年が経ちます。所々に破損やら塗料の剥がれが見出されるようになりました。そこで今回の支援制度を活用しまして、山車の屋根や上屋の作成・修理と塗りの塗り替えの他、傷んだ^{ちようちん}提灯も新しく作ろうと思っております。来月末には修理が終了しますので、より一段と華麗な山車を見ることができると思います。

山車の仕組みや山車を動かす技、お囃子等の技術を持つ人たちがだんだん高齢化し、そして若い人の地元での就職が少なく、伝承が難しくなってきたおる現在ですが、しかし今、若い人が少しずつ参加してくれるようになりました。これは大変心強いことで、これからも次世代への継承をしっかりと行い、その伝統的な祭礼を後世に繋いでいきたいと思っております。

ここで発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

市場町津島社氏子の会 氏子総代 角谷 良直氏



津島神社の天王祭り

市場町津島神社の氏子の会、角谷良直です。よろしくお願いします。

それでは、津島神社の天王祭りについてご紹介させていただきます。岡崎市東部の市場町は、かつて江戸時代の東海道 37 番目の宿場町である藤川宿の一部で、その規模を大きくするため幕府から命令があった際、隣町の山中郷市場に住んでいた住民を移住させ、加宿市場村となったことに由来します。この祭りは、市場町の氏神様である津島神社の伝統行事として行われ、愛知県津島市にある津島神社から^{かんじょう}勧請した牛頭天王を祀っています。そのため、この祭りは天王祭りと呼ばれ、夏病みの防止とその年の豊作を祈願する虫送りの意味も含まれています。

これは神社に残る建築工事の記録である村札の写しです。この資料によると、今から 280 年前の江戸時代中期 1738 年が津島神社の創建時期と推察されています。

祭りは、毎年 7 月の第二土曜日に、町内の全戸が参加して盛大に行われています。当日は、旧東海道からの参道となる入口の常夜燈の脇に^{のぼり}幟を立て、お立宮と呼ばれる^{たちみや}祠^{ほこら}を祀り、雄竹注連で囲います。この祭りは通称ちようちんまつりと言われ、画面にあるような^{かんとう}竿燈行列が神事として行われています。神輿^{みこし}の行列の前後に、長い竿に提灯を付け高く輝く高張や十二張の提灯の列が加わり、ほの暗

くなる午後7時頃より150個の提灯に灯りをともし、約70名の氏子らが旧東海道を厳かに巡行します。近年、外国生まれの町民の方も見え、この祭りに参加しています。行列は、神社参道のお立宮から旧東海道沿いに沿って、往復2kmを所々で祝詞^{のりと}をあげながら約2時間かけて巡行します。夕暮れ深まった街道沿いを赤い提灯がゆらゆらと練り歩く様は、宿場町として歴史的なまちなみを夜景にととも映え、夏の祭りにふさわしい素朴な美しさを感じさせます。

さて、祭りの主役である提灯ですが、昔ながらの伝統を守り、本物の和ろうそくを使って灯りをとめています。そのため、汚れや破れなどの劣化が激しく、新しいものと交換することが緊急の課題でした。そこで今回の支援制度を使って、傷んだ提灯を新しくすることにしました。市内に1軒のみ残る提灯屋さんに注文し、もうすぐ出来上がってきます。今年の夏祭りには、きれいな提灯がずらっと並び、美しい行列になることを楽しみにしています。

現在の祭礼



私が氏子総代として祭りに関わるようになって感じるのは、祭りの継承には、ひとえに町の人々の理解や協力が不可欠ということです。現代では、とかく派手な電飾等のパフォーマンスが好まれ、巨大テーマパークなどへ目が行きがちです。しかし、身近な家族や近所の大人たちが毎年手作業で準備をし、素朴な美しさがあるこの祭りを維持していくことが、我が子、我が孫へ市場町の原風景を伝えていくことだと思います。参加する大勢の町民に、いかに負担がかからないように継承していくのか、担い手をどう確保していくかという問題が現在の私たちに課せられた課題ですが、江戸時代から続くこの大切な祭りを皆で協力して、しっかり守り伝えていきたいと思っています。

これで発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

本宿町中町 総代 富田 武司氏



本宿神明社の祇園祭

ご紹介にあずかりました本宿町中町の総代、富田武司でございます。よろしくお願いいたします。

それでは、本宿神明社の祇園祭について紹介させていただきます。本宿のまちの西にあります本宿神明社の境内には、津島社の祭礼が、祇園祭、いわゆる牛頭天王を祀る天王社の祭りとして受け継がれております。江戸時代に本宿村で疫^{えきびょう}病が流行して多くの人が亡くなった時に、牛頭天王を祀ってい

た当時の立場、現在の東町では病人がいませんでした。これは天王さんのおかげだと始まった疫病除けの祭りが由来となっております。

古くは、神輿と提灯行列のみでしたが、昭和初期には、画面のように飾り付けをした荷車に子どもが乗って笛や太鼓を鳴らし、今の東海道を練り歩くようになりました。現在の祭りは、毎年7月の第四日曜日に本宿祭りと称して行われ、氏子の山車が巡行します。画面にあるような山車は4つあります。今出ております山車は、平成になってから復元された東町の山車でございます。戦前には東町と栄町、戦後に西町と中町の山車が作られました。古いものは、約80年以上のものになります。それでは、祭りの様子をご覧ください。動画をお願いします。

現在の祭礼



活動の様子

これは東町の山車でございますが、あと山車の後ろに青年の神輿がつきます。これは非常にシンプルな神輿ではございますが、青年の勢いが出ていると非常に各方面から注目されている神輿でございます。ご覧いただいた山車は、神明社と法蔵寺の間の旧東海道沿い1.3kmを、神事と舞い踊りを奉納しながら約2時間半かけて巡行します。

今回の支援制度の作業でございますが、昭和20年代後半にできた車輪ということで、この交換前というのを見ていただくとわかるんですが、ゴムが非常に劣化しておりました。それを交換するという作業を行いました。これにあたって、車輪をはずして寸法を測ったり、構造を分析したりしました。これ全部町内でやりましたが、先人の当時の町の中の様子が非常に浮かぶような作業が多かったです。例えば、鍛冶屋さんが車軸を継いでるとか、宮大工さんが加工して作った屋根、彫刻師さんの意気込みを感じる事が非常にありました。このような山車、自分たちで本当にやって良かったなと感じました。これらと同時に、作業の終了時に、今回作業に出たみなさんの名前を連名しまして、ラミネート袋に封入して車軸の中に入れました。これはタイムカプセルとして仕込みましたが、30年後になるか40年後になるかわかりませんが、これらの袋が出てきたときに、後世の人たちが、あそこのお祖父さんがこの作業をしたんだとか、未来の中町に思いを馳せてタイムカプセルを仕込みました。

今回の修理は、回り番の役員では到底手に負えないことでした。祭りを中心に町内の歴史文化を継承していく伝承委員会のメンバーが中心になって行っています。祭りを継承していくためには、祭りのやり方だけでなく、今後、その道具などの管理も大切ですし、それよりもやはり参加する人です。人づくりを町内としてやっていかないと、このような祭りは到底継承していけないかと思えます。ですので、町内としては、人をなるべく繋げていきたいという思いで、この祭りを継承させております。

これで発表を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

十王堂管理組織委員会 会長



藤川町十王堂の修景

私、十王堂管理組織委員の鈴木と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、藤川町の十王堂の修景につきまして、ご説明をさせていただきます。藤川は、東海道五十三次、この制度が制定されまして 37 番目の宿場として栄えたところでございます。画面は、今から 80 年ほど前の昭和 12 年に撮られた十王堂の写真でございます。創建の時期は定かではありませんけれども、江戸時代の中期、元禄年間頃と推定されております。また、東海道分間延絵図、これには十王堂が描かれておりまして、街道沿いの主な建物であったことがわかります。

これは修復前の十王堂の内部でございます。堂の中央には地蔵菩薩が安置され、その両脇に 10 人の王の像が並んでおります。十王堂の名前の由来となる 10 人の王とは、冥途の世界、つまりあの世の死者の罪を裁く 10 人の判官のことを言います。台の上には閻魔大王を中心に像が祀られており、昔から、嘘を言ったり悪いことをしたりすると、閻魔様に舌平を抜かれるぞ、罰が当たるぞと言われ、子どもたちの躰の場にも使われておりました。また、毎年 8 月のお施餓鬼の時には、地蔵まつりも行われております。

建造物の歴史や由来



昭和12年(1937)の十王堂

十王堂の屋根は、先ほど見ていただきました 80 年前の写真では寄棟造りでしたけれども、昭和 34 年の伊勢湾台風によって大きく破損をいたしました。当時は、元に修復する金もなく、この画面のような切妻造りの屋根、壁もトタンで覆って十王様を守ってきたわけでありました。日頃から懇意にしておりました愛知産業大学の宇野准教授の指導で、建築を学ぶ学生にも参加してもらいまして、屋根裏の調査や外部のトタンをはがして壁の状況や構造、工法などの調査を行ったわけでありました。この調査で、寄棟造りの痕跡が確認できました。また、先ほどの 80 年前に撮られた 1 枚の写真を参考に、使われていた部材も一部活用する復元計画を立てたわけでありました。

工事を進めるにあたり、十王堂の向かいにある藤川小学校の子どもたちにも参加協力をお願いをいたしました。新しいお堂の瓦には全校児童 280 名の思いと名前を書いてもらい、壁の中塗りは 6 年生に依頼をいたしました。動画をご覧ください。みんな一生懸命に作業をしてくれました。塗った壁は

杉板で囲われ、もう見ることはできませんが、参加した児童の心の中にはその思いがしっかりと刻まれたことと思います。これらの体験を通じて十王堂をより身近に感じてもらい、地域への愛着や誇り、そして歴史文化に興味を持つ機会になればと思っております。

多くの関係者の支援協力もあって、昨年12月、80年前の写真にあった十王堂が復元完成をいたしました。長年の夢が実現をいたしました。今度は、この場所が藤川の歴史文化の拠点の一つとして、また東海道沿いの景観と十王信仰の歴史を伝える貴重な建物として、地域住民や東海道を散策する多くの人々に親しみを持って見てもらい、大事にしてもらうことを願っております。今回の復元工事では、子どもから大人まで、幅広い世代の方々に携わっていただきました。伝統的な活動を守り伝えるためには、より多くの方々が関わりを持ち、地域全体で継承していくことがとても重要なことだと思っております。これからも地域をあげて、藤川の歴史文化をしっかりと後世に繋いでいきたいと思っております。

これで発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

第2部 基調講演

後藤 治 氏



歴史的建造物が地域を活性化させる

ただいま紹介いただきました工学院大学の後藤でございます。今日はこういうタイトルでお話をさせていただきます。

～全国の地方が抱える課題～

今日お話を聞いたところ、岡崎市は実はまだ人口減少になっていないそうなのですが、とは言え、岡崎市でも広く見て山間部の方に行ったらこういう状況になっているんじゃないかと思うんですが、今、全国の市町村のいろんな場所で少子高齢化、過疎化が進んでいて、空き家が増えているのが非常に問題になっていますし、商店街では空き店舗が増えてシャッター通りができたりしています。またそういう場所はさらに、学校や病院、郵便局などの公共施設もなくなるということで、自治体が消滅する危機を迎えているなんて話も出ています。そういう時に、なかなかすぐに人口は増えませんから、今、日本の国と地方公共団体では、何が地域を救うための有力なツールになるのかということで、観光によって交流人口を増加させましょうということと、市の中心部をコンパクトにまとめてコンパクトシティにしましょう、こんなことが自治体を救う切り札になるんじゃないかなんて話が出ています。

でも本当にこれが実現可能なのかというと、観光によって交流人口を増やそうと簡単に言いますが、魅力のないところには人は来ませんし、コンパクトシティにしたら本当に救われるのか、コンパクトにしても人口は増えないわけですから、コンパクトにして利便性を高めても都会の方が便利ですから、地方はコンパクトにしようとしてもどんどん都会に人が出ていくのが止まらないということですから、これではだめで、じゃあ何が必要かということ、やっぱり観光で交流人口を増やしたいなら人が来たいまちにしないとだめなわけです。人が来たいまち、人が来るようなまちには、いろんな人が店も出してくれるし住みたいと思ってくれるということで、そういう中で、どういうまちが来たいまちになるのかということの一つに、この歴史まちづくりというのが注目を受けているということです。歴史だけじゃなくて自然もありますけれども、私は歴史文化の方が専門なので、今日は歴史まちづくりの話をしていこうと思うわけです。

そういう中で、今日は歴史的な建物に限った話として、歴史的建造物の活用というものをテーマにお話したいと思います。実は、歴史的建造物を活用するということは、歴史まちづくりが成功するための最低限の、これがなければまず始まらないという第一歩です。その第一歩をうまく踏み出すためには、このリノベーションというのが最近の流行り言葉になっているのですが、大きな手間と暇をかけないで歴史的建造物を再生させるということが一つ大事なことです。何となく今まで、文化財というと大事に守るというイメージだったんですけども、文化財を大事に守るだけじゃなくて、これをどんどんちゃんと使って魅力をアップさせていく。大きな手間をかけずに文化財をうまく使って、でもその魅力アップするためにはキーワードをもう一つ、市民が参加してやらなければだめだということです。まずこの一つです。それがうまくいきだすと、空き家や空き店舗がうまく活用できるようになって、これは一つの建物じゃなくて地域で取り組むということができて、だんだんステップが上がっていく。実はこういうものを助ける制度が、今岡崎市が取り組んでいる歴史まちづくり法とかいろんな制度があるんですが、こちらについては今日は省略します。この後パネルディスカッションの方がありますので、そちらに置いて。こうやって単体の取り組みが地域に広がっていくと、ようやく手掛かりができるということで、最後に、歴史まちづくりというのは一体何のためにやるんだろうという根源的な問題に触れたいというふうに思います。

まず最初に、建物は使わなければだめだということをお話しておきます。これは富山県富山市で、私が文化庁時代に重要文化財の指定に関わった建物ですが、明治初期に建てられた素晴らしい町家です。こんな立派な梁が組んであって、非常に見事な家です。文化財ってよくこういう形で復元して保存してあるわけですが、こういう素晴らしい建物だと思うんですが、皆さん、ここに観光に行った時のことを思い出してください。これ見たときに、管理している人からこの建物の説明を受けたら皆さんどう思うでしょうか。だいたい素晴らしい家ですね、でもこれ維持管理するの結構大変なんじゃないですか。そうすると管理している人が、大変なんですよ実は、大変です結構。冬も寒いし、雪も降るし。大変ですね、頑張ってくださいと言って皆さん帰るわけです。で、2回目行きますか？1回見たら行かないですよ。管理している人はみんなに頑張ってくれと言われるけど、みんな2回目は来ない。そうするとみんな、こういうのを残すのにだんだんだんだんくたびれていっちゃって、何のために残しているんだろうと、こういう話になっちゃうんです。

実は、ここの文化財はそうじゃなくて、こういうことをやっています。文化財の中で子どもの絵の展覧会をやっています。この子たちは文化財に興味があるわけでも何でもないんですけども、こうやって絵の展覧会をやることによって、ここに来てこの管理している人の話を聞いてくれて、こういう子たちの中に一人でも二人でも、先ほど泥壁を塗っているシーンがありましたけれども、あれを塗った子どもたちの中に一人でも二人でも歴史的な建物に関心を持ってきて、自分もこういうこと、将来残すのに協力していきたいと思う子が生まれてくれば成功であります。誰も文化財を見に来ているわけではないんです。それ目的で使っていたら来ないです。違う目的で使っていると、見に来るわけです。

もう一つ。これも森家の内部です。素晴らしい座敷なんですけど、ここで普段何をやっているかというと、北前船きたまえふねの展示です。富山市は北前船で栄えていますから、模型とか掛け軸とかを掛けているんですが、この展示、皆さん2回見に来たくなるでしょうか。来ないですね。一回見たらもういいよという話になって、資料館として残している文化財はいっぱいありますけれども、資料館だけで残していたら二回目来ないです。文化財資料館として残して良かったねと言っているのは、全然失敗です。ここは何をやっているかというと、落語の会をやっている。落語と文化財、まったく関係なさそうに見えるんですが、こうやって落語の会を毎週やっていると、50~60人の人が集まって来ている。この50~60人の人は楽しんでいるんですが、50~60人で使っていると、中のうちの2人か3人は必ず和室の続き間って結構こういう会に使えるねというようなことを言ってくれます。また中の2~3人は、うちも続き間の座敷があって、こんな家は壊しちゃおうと思っていたけれど、やっぱり残してみようかしらという人も出てくる。それから中の2~3人は、こういう会の運営が楽しくて、落語が楽しいんだったらこの会の運営に参加してもっと楽しいことをやってみようか、また友達連れてこようかという人が出てくる。こうやって文化財と関係ないところでこの施設に人の知恵が結集するようになる。とにかく利用者を増やして楽しい施設にしないとこういうことにはならないし、リピーターが来る、何度も何度も使ってもらえる施設にするということが、結局、文化財に魂が入って使われる施設になるということで、こういうことにならないと魅力が生まれません。ただ単純に、歴史的に文化的に貴重だっただけではだめなんです。

今、国はそういうことに気が付き始めて、最近報道でよく出ているんですが、奈良県奈良市の北側に奈良監獄という今は少年刑務所になっていて、刑務所が出て行ってしまっただけで空家になってしまった素晴らしいレンガ造の施設があるんですが、これを国は重要文化財に指定したんですが、これを単なる資料館なんかにしてはこんな大きな施設を運用できません。で、何にしようとしているのかというと、国はこれをホテルに転用してもらって、民間の人に活用しながら残していったらおうということを考えています。活用しながら残すんですから、監獄の独房がホテルになるということで結構話題を呼んでいるんですが、さすがに独房の部屋をそのまま残してたんじゃホテルとしてうまくいかないんで、実際、1棟はちゃんと残すんですが、この5本指の4本の部分をどうするかというと、一部壁をぶち抜いて3部屋を一つのシングルルームにして、ホテルとして運用していこうとしています。つまり、文化財といえども改造を受け入れて、使える施設にしながら、なおかつ独房という刑務所時代の良さも生かしながらやっていこうということです。こういうことを国も真剣に考え始めています。使いながら残していく。いいところをちゃんと残しつつ、現代的な機能も持たせて将来使える施設にしていくということがとても大事なんです。

そのためには、貴重な文化財と言えども改造を受け入れなければいけないということで、これは実は世界の常識でありまして、これはイギリスの文化財の建物なんですけど、病院で使っている建物で、病院のストレッチャーなどを通すために増築をしています。イギリスの文化財は、皆さん知らないでしょうけれども、グレードが3つありまして、グレード1とグレード2*、グレード2の3段階に分かれているんですが、グレード1は日本でいうと国宝級です。国宝に増築を認めている。これは何で文化財になっているかというと、イギリスで最も長く病院として使い続けている建物だということで価値があると認められているので、彼らが言うには、改造を入れても病院として使うことの方が大事で、

使われなくなったら残らないということです。こういう場合に何が大事かというと、全部壊して建て替えて病院にしてもいいのかということそうではない。いいところを残して、でも必要な部分は変えて、どこを残してどこを変えてという、そこをしっかりと決めてちゃんとやっていく、こういうことが大事なわけです。

もう一つ大事なのは、市民の参加ということでありまして、先ほどの森家のことを考えてみますと、何も使っていない状態の森家というのがこういう状況です。一般の人は見せてもらっているだけで、管理している人が一生懸命、維持管理も修理も公開もしていて、行政はそれにお金を出している。この人はみんなに頑張れと言われて疲れてきて、これじゃ疲れちゃうから市や国にお金くださいよって、市や国の機関も頑張って補助金とかお金を取ってくるんですが、だんだんだんだん疲れてくるんで、もううち手放したいから何とかしてください、行政としてもそうはいかないから何とか頑張ってくださいって、行政もお金を取ってくるのがだんだん大変になって、市民は見てるだけですから、だんだん行政もくたびれてきて所有者もくたびれてきて、みんながトホホトホってなっている。さっきの何もしなかったらこういう状態です。ところが、先ほどの維持管理や修理、公開を、もっと市民が参加して一緒にやっていく。先ほど子どもが壁を塗っていたようにみんなで一緒にやっていって、ここを楽しくみんなで使う施設になってきたらどうでしょう。この人たちは無関心で見に行くだけではなくて、全員が行政に対して、もっとみんなで楽しくやりたいんで何とかしてくださいよという話になる。そうすると行政の人もうちょっと違って、おんぶにだっこで何とかしてくださいと言われるんじゃなくて、元気のある施設を元気にするために頑張るということだったら、それこそ市長さんにも掛け合いやすくなるんですね、行政の担当者も。

こういう形で大勢が関わることによって、初めてみんなのための文化財になる。無関心でほったらかしではだめでありまして、こういうことを達成するために、実は10年以上、15年も前に文化庁では、これは私がまだ文化庁にいた時ですが、公開するだけではなく使い続けることによって新しい価値を生み出さなければならないし、住民が参加してやることによって新しい価値が生まれるという、こんなことをパンフレットにしている、ようやく奈良の監獄みたいのところまでたどり着いたというところでありまして、まだまだ日本はこういう分野に関しては発展途上国であります。

こういう話をすると、とは言え文化財は結構お金もかかるし大変なんじゃないか、行政もそんなに持ち出すお金もないということがすぐに出てくるんですが、実はこういう市民が参加した活用ということももっと手軽にできることがたくさんあるんです。こういうことで空き店舗や空き家が再生できる一つの事例として、神奈川県の小田原市でうちの研究室が関わってやったことですが、空き店舗、お茶碗屋さんがやめちゃって物置になっている。こちらは町家が仕舞屋しもたやになってしまって、土間の廊下のところが物置になってしまっている。これを学生と一緒に片付けまして、掃除です。まちなみの再生は掃除からということで、みんなでまず掃除をすることにしました。掃除して、まちの人から古写真とか思い出の品物を集めてお茶碗の周りにディスプレイした。こちらは、やっぱり掃除をして、そこにパネルを付けて照明器具を付けて、ギャラリーで展示できるようにした。これはたった1週間のイベントのためにみんなで掃除をしたんですが、1週間のイベントのために掃除をしたらすごい効果が生まれて、ここを出て行った娘さんがこれを見て自分が使いたいと言ってくれて、使ってくれるように

なりました。ここは、ここを持っていたご主人さんがこのギャラリーの飾りを自分も非常に気に入ったということで、掃除しないでそのまま残してくれれば、自分が趣味で園芸とかやっているのをそれを飾りたいというので、そのまま使うようにやってくれました。こういうふうに、ほったらかしているとお荷物に見えていたものが、掃除するだけで、もともといい建物ですから素晴らしいものに見えるてくるんです。こういうことがあります。

こういうことは世界でやられていまして、こちらはイギリスのヨークという有名なまちで、古い商店街が観光名所になっているんですが、イギリスは少子高齢化していないかという日本と一緒に。実はイギリスの中心市街地も高齢化によって空き店舗が結構出ているんですが、このまちでは、空き店舗が出てもシャッターをするのを禁止、まちの景観のルールで。シャッターはショーウィンドウの裏側にするというのがルールになっていて、空き店舗になってもシャッターが閉まっていないのと、ショーウィンドウのところだけまちが借り入れて灯りをともしたりしているということで、空き店舗が出ても寂しい商店街に見えないようにして観光で頑張っているという、こんなことをやっています。

それから、これは奈良の^{かしはらし}橿原市今井町の事例ですけれども、空き家を使ってこれをちょっと再生することによって、今井町は補助金も出しているんですけれども、通りの側の景観は守って、耐震補強したり内部を改修して、こういうことをまちの中でみんなにやってもらいたいんで、それをモデルハウスとして公開して、ここは市民のたまり場になっているんですが、市民はここに行くと、どこに補助金が出てどういう改造ができるのかということがすぐに理解できるようになっていて、これを見て、今までまちなみ保存に反対だった住民の人たちが、これだったらうちもやってもらってもいいやというので賛成に回っていくという、そんなことをやっています。

こういう事例は全国いろいろたくさんあって、最近では、こういう補助金なしで民間だけでやっている事例ですけれども、東京都の台東区谷中、これはイメージで、こういう建物を使ってやっているということで見ていただきたいんですが、宿泊施設をやっている。常識を見直すことが大事で、宿泊施設という、お風呂も食事も受付も全部一か所でやるのが今までの常識だったんですが、実は近所の食堂にフロントがありまして、そこで鍵をもらって別の空き家に行って泊まっていて、お風呂は近くの銭湯で入って、食事は別の飲食店ですという。ゲストハウスは寝るだけなんですね、空き家の中で。そうやってまちの中を利用しながら泊まるという、そんなようなことで外国人がいっぱい泊まりに来たりしているということで、空き家や空き店舗を地域の財産として生かして成功しているという、民間だけの力でも結構うまくいっているのがあります。

そういうものが連鎖してうまくいっているケースとして、これまた私の研究室が関わっているところですが、秋田県横手市の増田町の事例を紹介します。ここは今、まちなみ保存をやられる地区になっていい感じのまちなんですが、実は一番の売り物は何かと言いますと、母屋の裏に蔵がありまして、ところが蔵は通りから見えないんですね。ここは雪国ですごい雪が降るものですから、母屋と一緒に屋根がかかっていて、家の中に蔵があるんです。家の中にある蔵というのがこんな感じで、中に入ると素晴らしいピカピカの蔵が入っていて、普段は見れないんです。このまちは何で流行り出したかというと、^{いなにわ}稲庭うどん、皆さんご存知だと思うんですけども、稲庭うどんのある有名な業者さんがこの

まちの空き家を使って店舗にして成功して、実はそれに使った家が、使った稲庭うどんの業者さんがこの蔵をうまく使って成功したんですね。そしたら、それを見た地域の人が、その稲庭うどんの使った蔵はそれこそ立派なんですけど、こんな蔵だったら他にもうちのまちにもっといいのがいっぱいあるよねという話になって、普段見れない蔵を年に一回だけみんなで協力してみんなに公開する「蔵の日」というのを始めて、それでそれとともに少しまちの風景をきれいにしていくような活動をしていったら、10年も続けていたら国の選定のまちなみになったりとかいろんなことがあって、最初始めた時の何十倍の人が今来ています。この10年で観光客が何十倍になっているというそういう状況です。

今は「蔵の日」という名前は変えましたけれども、うまくいっている。最近では、週末に観光客がぽつぽつ歩いてくれるようになりました。そうするといい効果が生まれてきて、実は、こっちが町がセットした観光案内所で、旧酒蔵のところを町が借り受けて観光案内所をしていたんですが、まちが観光でうまくいきたしたら、横手の地元の業者さんがここでレストランをやりたいという話が出てきて、そこで町は次の空き家を観光案内所にして、こちらは横手の業者さんに貸して、今はレストランとしてうまくいっています。そうすると、今度はこのレストランにものを食べに来た人がまちなみを楽しんで帰るといういい効果が生まれています。

さらには、町が所有者の方に空き家を再生して、少し空き店舗を再生するお金を出したら、その店舗を使ってパン屋とカフェをやりたいという地元の主婦の方がカフェを開いてくれて、こちらも空き店舗でカフェを開いてくれる地元の主婦の方がいて、このカフェがえらい流行っています。ここに来ている人は誰かという、町の商店街の若い人たちと役場、増田町の町役場という横手市の増田町分庁舎なんですけど、分庁舎にいる若手の職員がみんなここに入り浸っている。この町にはカフェが1軒もなかったのに、まちなみに取り組み始めてから今はカフェが4軒できて、どこも運営が成り立っている。ということは、実はもともと需要はあったんだけど、10年前までは後継ぎがないんで元気がなくなって店が閉まっていたから、需要があるのに需要を無くしていたんですね。元気のないまちは、せつかくある需要を失っていることがたくさんあるんです。そういうふうに考えると、実はここも成功したのは、偶然稲庭うどんの人が来てくれたおかげで資源を自分たちで発見できて、それで頑張ってみたところうまい循環が生まれて、新しい企業が出店してくるくらいだんだんいい循環が流れ出したわけです。店舗による新たな観光客が誘致されて、今は観光客の人が、前はまちなみを見るために来てた人が飲食をしてくれたのが、最近では飲食しに来た人がまちを見てくれるという非常にいい循環が生まれています。その結果、最近ではすごい事件が起きたんですね。吉永小百合が来ちゃった。大人になつたらしいこと、大人の休日倶楽部というのをJR東日本がやっているんですが、秋田デスティネーションキャンペーンで吉永小百合が来ちゃった。この蔵の前に、ここが吉永小百合さんが立った場所ですとちゃんと書いてある。まちの連中に私言っているんです。君たちね、歴史まちづくりに取り組まなかったら吉永小百合は来なかったよって。いろんな副産物があるということです。

こちらは兵庫県の篠山の集落丸山というところで、ここは限界集落で、立派な家がいっぱいあるんですけど、2/3以上が空き家になっちゃった兵庫県の篠山市の集落です。ここで何が起きたかという、私の知り合いの一般社団法人ノオトというNPOが今頑張って何をやったかという、空き家

を宿泊施設とかレストランに活用した。そうするとこれが成功して、ここに食材を提供する若者が空いた農家に定住したいと言い出して、そうすると、休耕田だらけだったのがそこで農作物を植えてくれるようになったので、実は 20 年前よりも集落の人口が増えて休耕田が減っているというそういう結果が生まれています。

ここに注目した内閣官房長官が、このモデルを日本全国に広めようなんてことを言い始めていて、それくらい成功している場所です。この成功の理由には、もちろんこのやり方がうまいというだけではなくて、関西には大阪、京都、神戸といった大都市がありますから、その大都市から来やすい非常にいい立地であるというところがあって、それでうまくいっているというところもあるんですけれども。岡崎市、今日私は名古屋から来たんですけれども、新幹線から名鉄に乗り換えてすぐ来れます。ここなんかもっと条件がいいんじゃないかと思うんですけれども。ということで、こういうことで成功することがあるわけです。

増田町とか集落丸山を見ると、地域に広げていく、一戸一戸の活用だけでなく、一戸の活用から始めてそれを地域に広げていくということが非常に有効なわけです。その時に、ハードとしてはこういうことが大事でありまして、修理と修景というのがあって、先ほど十王堂の修景という話がありましたが、それは修理と修景の間ぐらいじゃないかなと私は思うんですが、修理というのは直す、古いものを壊さないで直すことを修理と言います。修景というのは、建て替えとか新築をするときに、周りの古い建物に合うような形にしてまちの雰囲気を整えていくことです。ハード事業としては、修理と修景というのが車の両輪のような形になります。

こうすると、これはやれたらいいけど結構金がかかるよねと、どうしても自治体の人が思っちゃうので、もう少し簡単な事例でいうと、これは新潟県の方でやっている事例で、これは私がやっている事例ではなくて私の知り合いの事務所がやっている事例なんです、これが before で after。Before、after でどこが変わったかわかりますか。すぐわかりますよね。トタンが板になっています。それからシャッターとブロック塀^{べい}が、板塀と色が変わった。もう一つ大事なところがあるんですが、もう一つの大事な変化、気が付いた人はどれくらいいるでしょうか。大事なのはどこかということ、これです、これ。わかりますか、皆さん。花が植わったんですよ。この画面の大事なところは、民間と、個人と公と、この協働がうまくいっている証拠なんです。このトタンを板塀にするというのはちょっとお金のかかることなので、これは行政のバックアップを受けないとうまくいかないんですが、そういうまちづくりを地域がやり始めると、地域の住民の人は意識が高まって、自分も花を植えて協力しようかしらと、こういうふうになるんです。全部行政からお金をもらわなければやらないというのはだめです。地域にいる人が自分たちもまちをよくしよう、自分たちのできることは何かということで頑張ってくれる、自分たちのやれることが加わって、ハードとソフト、花ってソフトとハードの間ぐらいなんですけれども、こういうことが加わって初めていいまちになるわけです。

もう一つ大事なことがこのまちで起こっていることですが、建て替えたばかりの家というのはなかなかまちなみに協力するということができないんですが、このように車庫に門をつけてくれるだけで全然まちの雰囲気が変わるんですね。だいたい建て替えた人はお金を持っているものですから、こ

れくらいのはまちがちょっと補助するとやってくれるという話もあるし、実は多くのまちなみで最近建て替えれる人というのは、だいたいこういう人に限ってまちのリーダーなんです。こういう方は、別にまちの風景を悪くしようと思って作っているわけではない。その時にはルールがなかったからこういうふうな建て替えをしているんだけど、しまったな、もうちょっとやっておけばよかったと思う時に、こういう人がちゃんとまちの風景を作っていくのに協力ができるような仕組みにしていけることが大事で、そのために修景というのは結構重要なんです。古いものを残すだけじゃなくて、周りでちゃんと雰囲気合わせていいまちにしていける。ソフトもハードも含めて大事です。

～歴史的建造物を潰すということ～

ということで、こういう歴史的な建物を残したりまちをよくしていくというのは、もちろん建物を単体で残すということは、その古い建物は地域の歴史を物語っていて史跡的な価値も持っていますから、こういうものを文化的な意味でも残すということが大事だということはあるんですが、もう一つは最初にお話したとおり、建物はしょせん箱物ですから、それを違う新しい使い方をすることによって地域によっての新しい価値を引っ張り出すことができます。こういうものが三者揃い踏みになって初めて、歴史的なまちづくりの中でその建物そのものが市民のシンボルになったり誇りになったり、地域のまちをよくしていくための指標になっていくようなことになるわけです。こういうことを達成するためには、耐震補強がいたり、再生のための改修費とかがいるので、若干初期投資がいるので、これを民間と行政が協力していかに初期投資を引っ張り出せるか、こういうことが恐らく必要となってきます。

一方で、これをやめてまったくなくしちゃったらどうなるでしょうかということですが、なくしちゃうと建物が立ってた場所は空き地になってしまって、宅地分譲して新しい家が建てばまだ行政にとっては住民税が入ってくるのでいいかもしれませんが、空き地になって駐車場になっちゃったりすると、どこもまちでも同じような風景、他と何も変わりのない特徴のないまちになる。特徴を失ったらどうなるかというと、どんどん地域の地域性というものが失われていって、周辺地域と何ら変わらないどこにでもあるまちに変わっていったら。これからの皆さんは、どちらを選択するんでしょうと、こういうことです。

～なぜ、歴史まちづくりを行うのか？～

ということで、なぜ歴史まちづくりを行うんでしょう。私なんかは歴史まちづくりを進めていきたいと思いますと言う時に、必ず地元の議員さんとかがこういうことを言うんです。歴史まちづくりはよくわかったけれども、でもうちのまちは福祉や子育ての方が大事で歴史まちづくりはだめだよ、そんな重要性はないよとよくこういうことを言われます。じゃあ、本当にそうでしょうか。福祉や子育てに投資して歴史まちづくりに投資しなくて本当にいいんですか、ということを最後にお話したいと思います。人口減少や高齢化社会の中で、子育てと高齢者対策だけにお金を投資していて本当にいいんでしょうか。もうちょっと地域の価値を再考した方がいいんじゃないですか、とこういうことです。

歴史まちづくりは、そういう意味で歴史まちづくり法みたいなものというのは、先ほど言った歴史的建造物の再生もそうですが、まちづくりの第一歩です。何のためにやっているのかというと、さっきの増田町のように地域が元気になるためにやっているわけです。元気になる最初のきっかけとしては、来訪者がちょっと来てくれるとかカフェがオープンするとか、土日になんと人が歩いてくれるとか、そういうものが短期的なことなんです、中期的には、先ほど修理や修景が進んでまちの雰囲気はよくなっている。まちの雰囲気がよくなるって何なんだろう、別の言い方をすると、生活環境がよくて豊かな暮らしをしているということです。まちの雰囲気は、暮らしの表裏なんです。皆さんがどういう考え感覚でそのまちに暮らしているかということです。豊かな暮らしをしているからまちの風景が美しくなるし、ほったらかした家があるとゴミ屋敷が建ってまちの雰囲気が悪くなるんです。だから暮らしの表裏です。こういう豊かな暮らしをして美しいまちができるということは、長期的にみると、そこが誇りが持てる地域になる。誇りが持てる地域ってなんだということ、みんなが暮らし続けたい、ふるさとを一回出て行っても帰ってきたい、こういうまちになるということです。

～「地域の価値」を再考する～

そういう上で地域の価値というものをもうちょっと考えてみると、我々が子どもの時代、高度成長期ってどうだっただろう。そんなことは考えていないですね。駅に近いとか面積が大きいとか部屋数が多いとか、地価が高いとか、地域の価値は土地の値段。せいぜい言うなら日照がいいか悪いかくらいで、どのまちに住んでも条件は一緒で、駅に近ければ近いほどいい、部屋が多ければ多いほどいい、4LDKとか。だからどこに行っても条件は一緒で、都市の中なるべく便利な場所に住んじゃいましょうということです。郊外はどこに行っても同じで、逆にここに偏差値と同じでランキングが付いたりする。こんな中で、高度成長期は暮らしていたんです。最近、高齢化と人口減少が出だして、少しこの価値の指標が都会の不動産は変わりつつあります。どうなってきたかということ、最近、病院が近くにあるとか、コンビニがずっとあるとか、公共サービスが充実しているかしていないかというのが家を選ぶ時の指標に変わってきました。駅前というのは、どこでもいくらでも、隣の駅にもあるし隣の隣にもあって、その中でどこを選ぶかということです。だんだんそういう時代が変わってきました。

これがさらに進んでいくとどうなるか。^{ひるがえ}翻って今でもそうだと思うんですが、3つのまちでどこを選んでいくかという時に、病院やコンビニだけで選んでいるかということ、実は都会で人気のあるまちというのはほとんど、横浜とか川越とか神楽坂、谷中、根津、^{せんだぎ}千駄木、さっき言った歴史的なものがあって何となくその周りにいいお店がある。歴史的なものが残っているだけじゃなくて、横浜や川越、神楽坂なんかに行くと、観光的に少し人が来てくれるんで、そこに気の利いたお店とかいろんなところがあるので、飲食や買い物をしたりするときにちょっとこじやれたものがあると、その周りにみんな住みたいと思う。観光地のど真ん中に住みたいじゃなくて、この周辺が人気があるんです。つまり、歴史文化で頑張っていると、そこにいろんな産業、小さな産業が生まれてきて、その魅力によってみんなが暮らしたいと思うということがああるんです。よく地方で工業団地を造成していますけれども、工業団地が立派だから来るというよりは、こういう魅力があるところの近くの工業団地に企業だって来たいんです。地価が安かったらなおさらいいんですけれども。そういうことは置いて。と

にかく魅力がないまちには人は住みたいとは思わないし、これからまちを人が選ぶ時代になってきますから。

そういうことで、これまで話してきたことをキーワードに置き換えてみると、単体で始めてこれを集合でやればやるほどうまくいくし、ハードの建造物だけじゃなくて、そこにソフトがついてくることが大事で、短期的には飲食とか宿泊とかそんな感じなんですけれども、今日の歴史まちづくりの話題になっているお祭りなんていうのもソフトのすごく大事なところですよ。川越、お祭りの盛んなところですよ。

今日は、観光まちづくりの話も出てくるんですが、観光というと大げさなことを考えがちなんですけど、観光という文字は地域の光を見る。じゃあ地域の光って何だ、地域の日常です。観光客にとっては、地域の日常が非日常でありまして、地域の光を見る。東京の我々にとってみると、愛知の岡崎の生活は日常じゃないし、お祭りなんてまさに日常ではないんですけど、これは外国の人にとってみればもっとそうです。

そういう意味でもっと大事なものは、先ほどの増田町。カフェがなかったのが実は需要があった。地域で失っている需要を取り戻すということが結構重要です。これを毎日やろうとすると大変なので、限定的にイベントでやるというのが結構うまくいく最初のとっかかりとしては秘訣で、そういう意味ではお祭りというのはとてもいいですね。増田町で何でカフェがうまくいっているのかというもう一つの理由は、さっき言った主婦がやっているということ。要するに、カフェだけで家族を養っていこうとすると、これは無理です。主婦が片手間で行っているからうまくいくんです。これからの時代、高齢化社会で、皆さん年金もちょっともらえるわけですから、がつつり稼がなくてもいいわけです。楽しみながら、でもお小遣いがほしい。それくらいで楽しく暮らしている、楽しい日常を送っているところに、みんなが楽しそうだから来てくれるわけです。専業で観光で行っていいこうなんて思ったらとてもうまくいかないんですけども、何となくプラスアルファで行っていくということが結構うまくいくことです。

～地方と大都市圏を途上国と先進国の関係に置き換えてみる～

また別のキーワードですが、私の建築の分野の話をしておくと、地方と大都市の関係性を途上国と先進国の関係性に置き換える。これは実は、鳥取県知事をされて総務大臣もされた片山善博さんがよく言われている話なんですけど、地方と都会の関係を途上国と先進国の関係性に置き換えると、地方は素晴らしく貿易赤字の状態だ。都会の方が反映していて人口も流出している。こういう時に発展途上国って今、世界中で何をやっているのか、発展途上国がまず自分を出す産業とか輸出品は何かというと、自然と風景と伝統工芸で、歴史文化自然が資源です。地方が都会に勝つにはこれしかない。赤字を解消するために、こういうものを産業にしながら次のステップをして、新しいものをこれに加えて成功して行っているわけです。でも、日本の地方と途上国の圧倒的な違いがあります。発展途上国は人口が増えていますけど、日本の地方は減っています。それが今、悲劇的に語られているんですけど、私はこれは悲劇的でもないと思っているのは、発展途上国は人口が増加しているせいで先進国にみんな狙わ

れています。アフリカやアジアの国、ヨーロッパやアメリカや日本、どんどん進出しようとして狙われている。日本の地方は、人口が減少しているせいで誰も狙っていない。誰も狙っていないということはいいことなんです。自分たちでやれるチャンス。地産地消という言葉がありますけれども、大きなスーパーが出て行ったら、地産地消に戻す絶好のチャンスなんです。そういうふうに変えてみると全然違って見えてくる。

そういう中で、我々建築の分野では、さっきみたいな家の建て替えを見てみると、A県内を見渡してみると、ハウスメーカーの家がいっぱい立っているわけですが、これこそ大都市圏の資本の流出でありまして、こういった住まいづくりの投資を地域に戻して地域内での経済循環をつくるという意味では、まちなみ保存とか歴史まちづくりというのは、もっともこういう家づくりを地域経済の中に位置づけるという意味では非常に役に立つ。

～歴史的建造物の活用がなぜ有効なのか？～

そういうことで、修復工事がもたらす地域活性化ということで、歴史的建物は地域特有の工法で地元の職人さんや工務店がやっている。なおかつ人件費率が高い。これが20世紀は悪いことのように言われたんですけども、これからはものを使わないエコです。ものを浪費しないで人件費率があるというのはエコだ。ということで、逆転の発想をすると、実は古い建物を残したりまちなみを大事にしたりするというのは、実に地域経済と結びつくものなんです。なんでかっていうと、木を使うと地場産材を使用する、名古屋城も木造化なんて言ってますけれども、これと似たような話で、またもっと大事なのは、職人さんや工務店が元気になるとどうなるのか。地元で飲んで食ってくれる。それから職人さんや工務店が祭りに参加してくれて、なおかつ消防団にも参加してくれるといういいことづくめです。こういう人たちが、やはり地元の家づくり、メーカーの家づくりじゃなくて地域の家づくりで元気になるような社会を作っていくのがこれからは大事だというふうに思っています。

その証拠に、これは本当の話なんですけど、新潟の地震の後、私だいたい大きな災害があると、歴史建造物を救う活動をしている関係で2週間くらい現地に入るんですが、新潟の地震の後に驚いた風景は、お寺や神社に関してはすごく修復が早くて、民家は集落によって復旧が早いところと遅いところに差があった。その差は何で生まれているかというところ、お寺には出入りの工務店がいるんです。出入りの大工さんや職人さんがいるところは、非常に早く復旧している。ところが、そういう人がいなくなっちゃったところは、いつまでたっても直してもらえないんです。今、事前の耐震補強とかそういうことばかりが話題になっていますが、事後の復旧のスピードというのにあまり社会は注目していないんですけども、地域で職人さんや工務店が頑張っているところというのは、こういうことがあるんです。地元産業があるということです。

～地域を元気にする「職人力」の提唱～

今、こういうことも提唱してまして、これは宇野先生なんかと一緒にやってくれるといいなと思っています。さきほどの十王堂なんかそうですが、地域を元気にする職人力ということです。

職人さんが頑張っているまちは防災もうまくいくし、消防団もできる。職人の遊びや寄附が地域経済を元気にする、木を使った家づくり、人力は最も環境にやさしいエネルギー、こんなこと誰も言わないですけど。ソーラーカーよりも人力だと私は思っているんですけども。手仕事が一番大事だというのは、教育にとってすごく大事だというふうに思っています。なおかつ、職人さんが頑張っているところは文化財保護や観光振興もうまくいくということで、これからの国の、これは国に対して政策何かないですかという時は私は必ずこれを言うことにしているんですけども、職人さんを非常勤の公務員として、もう少し地域の独自のプロダクトをできるような仕組みというものを国の中に置いていくと、日本と地域というのは豊かになるんじゃないかなと思っているわけです。

最後のまとめですけども、いろんなところで私の経験しているところと言うと、成功しているところは効果の連鎖が発生していて、そこには継続した地域資源への投資があって、これが大事ですね、資源を活かすための市民活動がちゃんとあるということです。つまり、市民と行政が足並みを揃えてこういうことをやる覚悟が問われている。昔の人はよくいいことを言いますね。ローマは1日にしてならずです。継続して歴史まちづくりに取り組んだところが勝つんです。そういうところは、単体の建物がある、場所の力がプライドに変わるということです。

高齢化人口社会の中で、今生き残りをかけた地域間競争がある。生き残るところは選ばれる地域で、私は大学の経営をやらされているんですが、理事長で経営責任者です。地方都市と私立大学はそっくりです。何でかという、高齢化と人口減少で人が増えないので経営が大変。これからはどうやっても成功しないんです。大学なんてのは一番の縮小産業です。地方都市以上に危ないです。そういう時に、我々工学院大学も生き残らなければならない。今130年の歴史があって素晴らしい大学なんですけれども、みんな知らないでしょうけれども。特色がないところは生き残れないんです。地方にとっても、我々私立大学にとっても特色ってなんだ、歴史に根付いてそこに新しいものを加えることです。岡崎市長さんと私は非常に立場が似ているんじゃないかなと思うんですが。ということで、この後これをネタに対談したいと思うんですが、これで私の話は終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

第3部 パネルディスカッション

コーディネーター

瀬口 哲夫 先生

パネリスト

後藤 治 氏

野本 欽也 氏

内田 康宏



東海道に伝わる歴史文化資産を活かしたまちづくりの新たな展開

瀬口先生

瀬口でございます。よろしくお願いします。

本日は、先ほど基調講演をいただきました後藤先生、野本先生、それから内田市長さんにご意見をいただきながら「東海道に伝わる歴史文化資産を活かしたまちづくりの新たな展開」ということに向けて、意見交換を行っていきたいと思います。

2つのテーマを考えておりまして、最初は「歴史文化資産の持続可能な継承」ということでございます。先ほどの基調講演でもありましたけれども、今回は特に東海道、先ほど祭りの紹介がありました東から来ますと本宿に入って矢作川の川を渡って神社のあるところまで約20kmの東海道が岡崎市内を通っているわけでございます。その中、私も時々車で通ったり、夏祭りの時はほぼ同じ時期に夏祭りをやってますので、国道1号線を車で通っておりますと、連続して祭りが行われているのを見ることができるといことで、非常に特徴のある地域かなというふうに思っております。そういう個性を活かしながら、東海道のまちなみと祭り、生活、そういうものを今後の歴史資産として継承していくということが重要なので、まず最初に、歴史文化資産を研究なさって調査をしておられます野本さんから、東海道に伝わる信仰や祭礼等の歴史的背景についてお話を伺って、まず基礎的なベースを得たいと思いますので、よろしくお願いします。



～テーマ①：歴史文化資産の持続可能な継承～

野本氏

私の方から少し、今まで私自身が歩く、見る、聞くで10年間、そういう気持ちの中で見てきた、行ってきたところ、それから地域の方々から教えていただいたことを少し紹介させていただきたいなと思います。

先ほど第1部の方で、5つの事例の報告をしていただきました。本当に元気になりました。これで今年も、私も元気でまた放浪の旅に出られるかなと思いながら、今日いただいたこのお餅は神棚に飾りながら、自分の願っていることが叶った時に食べようかなと思っております。本当にありがとうございました。祭りっていうのはそういうもんだろなということを意識しながら少し、その10年の中で私自身が一番、この10年、岡崎の祭礼行事を見る中で一番気に留めて、このことを少し深めていきたいなと思っていることが、伝承という世界は最も文字に残りにくい人々の本質の部分を示しているのではないかなと思っています。ですから今日の事例の中でも、山中八幡宮のデンデンガッサリから矢作神社の山車というものを、本当に煌^{きら}びやかな山車を出してくるんですけれども、その中の本来の狙いというのは、やっぱり村の安定、豊かな暮らし、それから村人たちの幸せを求めて山車が町引きされていくんだらうと、そのようなことを感じています。津島神社、それから本宿神明社、十王堂の修景の報告の中にもありましたように、祭りがこういう形で現在まで繋がってきているという一つの背景をもう少し細かいところを残された資料、これは今伝承されている祭礼行事も含め、それからその中に何を意図してこういうことを展開をしているのか、その辺を少しきちんといくつかの場面をしっかりと繋げて、それを評価をしていかなければというふうに私自身今考えております。



そのためにも、祇園系の祭り、天王系の祭り、昨年くらいからかなりの祭礼行事を見てきました。そうすると、本当に違いがよく出てきます。山車を出すところ、それから藤川のような形で竿燈という、そのような形で十二張を出してくる。ちょうちんまつりという別称がある以上、このちょうちんが非常に大きな役割を果たしてくるんですけれども、こういう形でちょうちんを十二張、竿燈という秋田の竿燈の一つの系統、流れがどういう形でここに来ているのかということも含めて、もう一度、なぜここにこういうものが定着したんだらうか。津島の一つの祭礼行事、天王さんの祭りを見てくれば、菅生^{すごう}神社では神^み流し^{よし}を行い、これは厄^{やく}疫^{えき}の退散^{たいさん}をさせるための形^{かた}代^{しろ}流し、神^{かた}流し^{しろ}ということをやっている。それから、菅生^{すごう}川をずっと遡^{さかのぼ}っていくと、夏山から大雨河等々、4つの四天王という形で村の出口と入口に津島の神札を立てる場所を設けている。だから村の中に厄疫が入ってこないという。そして村がずっと幸せに、五穀豊穡を願って祭礼を行う。そんなようなことの一つひとつの残されている事実を、できる限り何とかくっつけて、そのためにも岡崎の場合のきめの細かい調査記録というものを作りながら、それを元に地元の中に返していく、そういう作業がこれから必要になって

くるんではないかな。それを元にどういう形で繋がれてきたのか、それからいつ頃、いつ頃というのは本当によくわからない。文字に表せられない一つの信仰伝承というのは、ほとんどがそういう形がありますから。ただそれぞれの地域で、ルーツが同じでもいろんな表現の仕方が出てくる。なぜ藤川は竿燈という一つのスタイルを確立したのか。その背景には何があるのか。というようなことも含めて、地元の方々の伝承者と合わせて検討しながら、その価値を付けていく必要があるのかなということを思います。

特に岡崎というところは、東海道や矢作川、菅生川、いろんな形で文化の伝わる系統というのがたくさんあるんです。それからもう一つは、ちょうど東西日本の中間地点でありますから、いろんなものがここに混ざり込んできている。だから、いろんなケースのものが見られるということで、もう少し頑張って今日いただいた元気をもとに、さらなる調査というものを深めていきながら、一つひとつの祭りをしっかりと繋げていけるような、そんな役割をできたらいいなということを思っています。そしてできれば、いろんな形での山車の話、それから天王系の祭礼ならば、いろんな形での周辺のネットワークづくりというのが、これからは必要になってくるんではないかな。だから、こういう形で繋がれてきたということに、価値があるし、そこにどんな地域にとっての力をいたすかというところを、これからしっかりと継承しながら、これをどういう形で次の世代に伝えるかというところを、これから真剣に考えていきたいなということを思っています。またそういうものを含めて、皆さんのお話を伺える機会があればありがたいなと思っています。よろしくお願いします。

瀬口先生

ありがとうございました。今日紹介していただいた祭りが、ルーツが同じものがあるじゃないかと。そういうものを辿っていくと、人々の交流、人々の動き、そういうものが見えてくるので、そういうものが見えてくると、祭り相互の表現の違いなどもどこから来たのか、こういうことを基本的に調査し明らかにすることによって、祭りの価値とか人々の生活、営みのこれまでの伝承が、非常に価値付けができるんじゃないか。そのためには、役割づくりが必要なんじゃないかというようなことだったと思います。

私は、天王祭りというのだいたい東日本の祭りで、祇園祭りという西日本の祭りだという感覚だったんですけど、これは地域的に見るとまた別の見方ができるのかなということで、ぜひ深めていていただきたいなと思います。ありがとうございました。

次に、先ほど基調講演をいただきました後藤先生から、歴史文化資産の持続可能な継承に関する、先ほども事例をいただきましたけれども、新たに付け加えていただいて、特に岡崎市へのご助言等があればお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

後藤先生

野本先生からあった話というのは、先ほどの私の話でいうと、リピーターを生むためのソフトだと思うんですね。古い建物とかまちの雰囲気がいいというだけだと、来ていただいても1回2回で終わっちゃうけれども、そういう時にその裏にある祭りであるとか地域の違いであるとかその背景というのが詳しくわかればわかるほど、行った時に話を聞くと、同じ体験していることでもずいぶん違って見えてくるはずなんです。より大事なものは、地域性が浮き上がれば上がるほど、地域の人にとってみるといい意味でのライバル心が生まれると思うんです。隣のまちには負けたくないというですね。そ

ういうものというのは地域を元気にする活力になってきて、全体が同じ方向を向いていても、それぞれがライバルで頑張ってくれる。我々の大学でも各部署の部長たちに言っているんです。それぞれライバルだけど同じ方向を向いて頑張ろうと。そういうことは実は単なる経営上の話だけではなくて、自治体もこれから、公共がいろいろバックアップしてきた時のことを先ほど話しましたがけれども、バックアップすべきだと言いつつも、そんなに資金が国も地方も潤沢にあるわけじゃありませんから、そういう時に今注目されているものは、ふるさと納税とかクラウドファンディングとかいろいろ集める、お金を集める方法っていくつかツールはあるんだけど、ツールを使って集めた時に集まるところって何だろうと考えると、地域の人みんな地域に愛着を持っていて、ふるさと納税したくなる自治体とそうじゃない自治体って恐らく分かれてくると思うんです。お土産がいいかというのがニュースに出ていますが、そんなじゃなくて地域のお祭りを持続させるために頑張ろうとか。私の知っている山形の新庄市というところは、非常に過疎のまちを担っているんですけども、すごくお祭りが盛んなところで、お祭りの時だけは地方から出て行った人がみんな集まるし、寄付も集まるしという、そういう場所もありますから。実は大学も似たようなことがあって、寄付が集まらない大学はこれから負け、国の補助金が減っていっちゃうから厳しいという話もあるんで、いかにOBがもう1回自分の母校を振り返ってくれるかというのをキーワードにしてやっているんで、そういう点も自治体とよく似ているんじゃないかなと思います。

実は今日、少しハードルの高い技術的な話なので皆さんの前ではしなかったんですが、自治体が資金とは別に民間の歴史的な建造物を助ける方法としては、規制の緩和、規制を弾力的に運用するという表現を知っているかもしれませんが、今、建築基準法とか旅館業法とかいろんな法律がネットワークになっていて、歴史的建造物を再生したい民間の人たちの活動みたいなのがうまくいかない時があるとよく言われていて、政府もそういうことに注目してやってほしいという話があるんですけども、なかなか国レベルでうまくいかないところを、自治体の独自条例とかそういうもので助けていくというやり方もありますから。これも大学と似ていて、他の大学と同じことをやっていたら勝てない。自治体独自の仕組みや仕掛けを、条例みたいなものを使ってやっていくというのも一つの手かなと思います。



瀬口先生

ありがとうございました。歴史まちづくりを行っている岡崎市の考え方は、まあ全国的にも共通なんですけれど、ソフトの部分、人々の祭りとか生活の営みと、その舞台である建物とか通りとか、先ほどの十王堂とか神社とか寺院、そういうものを一緒に整備していくことによって、住む環境を向上するとか地域の人のプライドが強まるんじゃないか。そういう意味では、今後藤先生が指摘されたふるさと納税とかクラウドファンディングとかいうものは、そういう舞台を作ることにも使えるわけです。それでももちろん、ソフトの祭りやそれを支援するような活動に対しての目的的なふるさと納税というものもありますけど、クラウドファンディングも目的的なので、そういうものをセットにしていくと、今日のテーマである東海道沿いの風致、それから今まで行われている歴史文化的な活動

が持続的に進む。だから価値付けをまずやって、それからハードとかソフトの支援をしっかりとしていく必要があるのではないかというのがお二人からのお話だったというふうに思います。

今のお二人の意見、お話を受けて、東海道に伝わる歴史文化資産の持続可能な継承に向けて、市長さんから今後のお考えを伺いたいと思います。よろしくお願いします。

内田市長

先ほどのデンデンガッサリもそうだと思うんですけども、今日ある歴史的な文化資産というのは、関わっていただく方がいたからこそ、こうして長く受け継いでこれたものだと考えております。そこには、大きな誇りと深い郷土愛というものを感ずることができるわけでありまして、私がまちづくりに対していつも重要視しておりますのは、この誇りと郷土愛であります。祭礼や歴史的な建造物などの地域の歴史文化資産を将来に渡って引き続き継続していくということは、これまで以上にそうしたことに関心を持ち、また関わってくれる方を増やしていくことが必要だろうと考えます。そのためには、まず知っていただく、興味を持っていただくということが一番大切ではないかと考えます。

そのために、興味を持っていただけるような情報発信の場として、本市におきましては、歴史まちづくりシンポジウムを毎年開催しております。今日のように、地域の祭りを継承させていただいております団体の皆さまにもご参加いただきまして、それぞれのプログラムの中でお祭りを広くわかりやすく紹介していただくことで、他の地域の方にも興味をもっていただけたのではないかと、このように啓発活動を行っていきたいと考えております。ぜひともこうした機会に本市の歴史的文化資産が持つ魅力や価値への理解と関心を深めていただければと思っております。そして、そのことが先ほども申し上げましたように郷土への誇りと愛着を持つきっかけになることを期待しております。

また、本市におきましては、先ほどの活動紹介にもありましたように、歴史的な風致を形成しております歴史的な建造物の保存活用や歴史と伝統を反映したお祭りなどの活動の継承に対する支援といたしまして、本年度から補助金を交付しているところであります。具体的には、お祭りで申し上げますと、継承に必要な記録作成や調査研究、後継者の養成、用具の修理、そして情報発信や普及啓発に係る事業について、その費用の一部を支援させていただいております。役所仕事というのはどこでもそうでありますけれども、計画してきちんとやってはいるわけですが、その運用において、どうも効果的な運用ということに対する柔軟な対応というものが苦手でありまして、私いつも担当の職員にもっと商売気を持って、いかにしたらもっと効果的になるか考えて仕事に取り組んでほしいということを言っているわけでありまして。

このほか、持続可能な継承においては、行政と民間、それぞれの強みを生かす、いわゆる公と民の連携によってこの事業を支える仕組みを整えることが重要ではないかと思っております。本市ではこの度、東岡崎駅の前に新たな岡崎のシンボルとして、若き日の25歳当時の家康公の騎馬像を作る計画を立てておったわけですが、これが何と市民からの浄財、寄附金で建てることできるようになったわけでありまして、今後はこういった事業を行う時には、さらにインターネット上で不特定多数の皆さま方からも寄附を募るクラウドファンディングによる資金調達や歴史的な建造物の保存活用に携わる



専門家の知見など、民間の資金やノウハウを更に活用して、経済活動の中で歴史文化資産の持続可能な継承ということを展開できないか研究していきたいというふうに考えております。

瀬口先生

ありがとうございました。市長さんからは、誇りと郷土愛ということからスタートにして、基本的には、そういうものを守っていくというのは参加すること、関わるということだと。一方で、ふるさとの風景がその中で継承されていけば、ソフトとハードの両接点で誇りと郷土愛が生まれるんじゃないか、生まれるに違いないと私も思いますけど、そういうことだろうと思います。そのためには、行政の支援をすでに始めているということと、行政だけではなくて、行政と民間のノウハウ、協力関係、それから先ほど後藤先生からお話がありましたように、歴史的建造物なんかも事業性を付加した形で活用していく。歴史的建造物をそのまま見るだけではなくて、何らかの形でそれを使っていくこと、見ていくこと、そしてそれに事業性を持たせるということが基本的に重要なのではないかと。

今度は逆になりますが、それを支えていこうとすると、その地域の活動が大切だし、祭りやなんかの活動も、そういう歴史的建造物を使うとか、例えば旧道のまちなかを、先ほどの写真で見ると、電柱なんかが見えている。山車のルートなんか明示されていて非常にいいなと思ったんですけど、少なくとも山車のルートくらいは電柱をなくしてくれよという声があるんだと思うんですね。そういうものを、地元の方と行政と、民間の企業と、どういう形で実現していくかということも参加の一つかと思いますので、ぜひ今日のお二人と市長さんのご意見を踏まえながら、岡崎の歴史文化を継承するような形に育っていけたらいいなと思います。

～テーマ②：歴史文化資産を活かした地域活性化と観光振興～

瀬口先生

そんなことで、時間がもう半分くらいきてしまいましたので、次のテーマ、2番目のテーマが、「歴史文化資産を活かした地域の活性化と観光振興」です。継承するということが大切で、事業性を持たせるとか、それを活用していくということが非常に重要なんですけど、地域の活性化と観光振興という視点で少し焦点を当てていただいて、ご意見をいただいたらどうかなということでございます。

私も豊橋に20年間住んでおりましたけど、先日、豊橋に半日くらい行っておりましたら、この10年間豊橋は人口が減少しているんですね。岡崎市はまだこれから10年間くらい人口増加という予想だそうなんですけど、そういうことを考えていくと、地域の活性化というのは非常に重要だし、観光振興というのも別の意味で、先ほどお話があったような形で重要だと思います。成功事例も踏まえて、ぜひこのテーマについてお三方からお話を伺いたいと思います。また野本さんからの話を最初に、恐縮ですけどお願いいたします。

野本氏

今日、これだけのものを見た限り、かなり長い年月、最初のスタートの姿が現在まで残っているということは、これはありえない。江戸時代の姿が現在のところまで、山車でいえば奥正面にテント、

こういう全体が、それから十王堂でいえば十王堂の中に宝永^{ほうえい}の年号が刻んである。ということになると、18世紀の時代からこういうものは繋がってきているというものは伺えるわけですが、いろんな時代を経て現在の姿を私たちは見ることができわけですが、これをこの中で何が変わってきているのか、何を変えてきたのか、なぜこの祭りをこういう形でこの地域は受け入れてきたんだろうか。そこには地域のいろんな状況が反映をして祭礼行事というものも当然変わってくる方向にきているわけです。例えば、本宿の祇園祭りでいえば、流行り病が起こった、これを鎮めるためにこういう形での牛頭天王を祀っていく、そのようなものがいろんな形で山車を出す、それから提灯、そんなような傾向の中で祭りの変えてはならないところをどこがどうなのかということをもう少し明確に評価をして記録に残していくと同時に、これからこういうものを通じて地域の中で子どもを育てる、後継者を育てるというのは語弊がありますけれども、十王堂の修景のところで子どもたちが土壁を塗っていました。こういうことがやっぱり体験としてすごく大事なんだな。後藤先生のお話の中にもあったように、1人でもこういうものに対する気持ちが甦ってくれるなら、こういうものは本当にいろんな形を出てくるのではないのかなということを思います。

岡崎に移り住んできた人たちも、例えば矢作、藤川、本宿というところに新しく入ってきた人たちも、そういうものの中にコミュニティとしてのいろんな形での参加を促すときに、ずっと入れるようなそういう一つの行事というものを計画しながら、コミュニティの形成のための手段として、祭り、そういうものは利用できるのではないのかなということを思っています。地域の中でそういうものを育てていく勉強会、本宿では伝承委員会というのを作っている。これは大きな動きだと思います。こういうものを通じて、地域にとっての宝というものをどういう形で繋げていくのか、そしてそれをどういう形で今日のテーマの中にもあったように磨くのか、そしてそれが地域にとっての幸せにどういうふうに繋げていくのかというところを、一つの祭りを通じて地域の再構築を図るには祭りというものは非常に大きなものを持っているのではないかなということを思います。

外から見る人間は、非日常的なものを見せてほしい。地元の者にとっては日常的なもの。でも日常的なものの中にももう少し光を入れて、それぞれのところのピースに価値付けをしていく必要がこれからあるのではないのかなということを思います。

祭りというのは、いったん中止すれば再生するには本当に大変な努力がいる。やめることは簡単です。繋げるときに、どれだけの世代間の協力と同時に、どういう繋ぎの仕方をしていくのかということこれから本当に一緒に考えていかなければいけない大きな問題であろうと思っています。またそんな機会があったら、ぜひ一緒に検討させてください。

瀬口先生

ありがとうございました。私の知っている名古屋の老舗の方が言っていましたけども、老舗というのは続けることが大切だ、いっぺんに儲けようとするとうまくいって潰れると。拡大すると、次もずっと拡大することはありえないので、続けることが老舗ですということをずいぶん言っていましたけど、祭りもきっと同じなんですね。派手なお祭りをばっとやって後絶えてしまったら、中断してしまったら続かないので、やっぱり継続していくというのが祭りの基本にある。そういうことが人々の、そこで生活している人々の絆を強くして、コミュニティを形成することに非常に役立っているんじゃないかということだったと思うんですね。先ほど本宿の例がありましたけれども、伝承委員会なんかもパンフレットを置いてますよね。研究成果を置いてあるので、結構東海道を歩いている方もそれを持っていたい

ていると思うんですけれども、そういう地道な活動を続けていくというのも、地域の人も地域を知ることができるし、外から東海道を歩いている人も地域の歴史を知ることができるということで、そういうことがあれば地域の人もちょっと通りを歩く人が増えれば活力が湧くというんでしょうかね。建築でも空き家になっていると、建物というのは力がないです。先ほど写真がありましたですね。活用していれば花が植えられたりしますので、建築そのものが生き生きしてくる。これは不思議だなと思うんですけど、人間と一緒になんですよ。ですからこういう祭りのあるところ、人が行き交っているところというのは、非常に活性化していくということでは、非常に重要だなと私も思います。

次に順番を変えまして、市長さんから、岡崎市は観光産業都市ということを目指しております。そういう実現に向けて、東海道をテーマとした歴史観光を今後どのように進めるのか、どういうふうにお考えになっているのかをご紹介いただきたいと思います。

内田市長

これまでの岡崎の観光のあり方というのは、どちらかというと非常に受け身のものであったんじゃないかと反省しております。興味のある人どうぞおいでになって勝手に見てください、こういうような非積極的なスタイルだったのではないかと考えております。それはこの地域の豊かさというのは、自動車産業を中心としたものづくりに傾いておりまして、私が市長になりました当時でもまだ、岡崎はものづくりで栄えているんだから、そんな観光なんて余計なことをやらなくてもものづくりに特化してしっかりやっていればいいんだよ、こう言う方があったわけでありまして。そのおかげで豊かなわけでありましてけれども、岡崎がどんなに自動車を作っても頑張っても豊田に追いつくことはないわけでありまして、岡崎は岡崎独自で持っている美しい自然と歴史的な景観を持った歴史的な資産を観光産業として育て上げて、それをもう一つの経済の柱にしていきたいと考えているわけでありまして。

そこで各地に点在する歴史的な資産を面としてフル活用するためには、公と民が今まで以上に連携して、もっと具体的なテーマやストーリーで繋いだ周遊ルートを形成して、交通手段、歩行者空間や駐車場の整備ということもしっかりやっていかなければならないと考えております。地域が一丸となった観光産業の育成ということは、なかなか難しいんじゃないかと考えております。

それから具体的な課題としては、おいしい食べ物。どこに行ったら何を食べようというものが観光地に行ったら必ずあるわけでありましてけれども、岡崎は八丁味噌は有名でありますけれども、まだ岡崎に来たらこれを食べようというようなものが明確にないわけでありまして、ぜひそうしたものを作りたいと思っていますし、魅力的なお土産、岡崎に行ったらぜひこれを買って帰ろう、こういうふうに皆さんにイメージしていただくものも作りたいと思っています。また、市民の皆さまのご協力の中で、岡崎に行ったらこんなに気持ちのいいことがあった、岡崎に行ったらこんなに親切にしてもらえたと、市民一体となったサービス、おもてなしの心を育てていきたいと思っています。

そして、東海道沿いの歴史観光につきましては、交通手段は鉄道や国道が並走しまして大変便利であることが強みであるわけでありまして。最近では新東名も開通いたしましたし、そして近年、個人の散策者の方が増えてきているわけでありましてけれども、そうした方に対しては、サインやトイレ、観光案内板、こうしたものがまだまだ岡崎には不足していると考えます。そこで例えば、江戸時代、東海道の旅行者の目印として道沿いに一里ごとに設けられました一里塚にちなみまして、約 4km ごとにそうしたものを設けるなど、受け入れの環境強化についても検討しているところであります。

東海道沿いに点在する観光スポットへ誘導案内するサインでありますとか、地域の歴史文化を理解

するための解説板というものも数が不足しておりますし、十分ではございません。また、よくこういったものは、ライオンズさんとかロータリーさんの関係の方からご寄附いただくわけございまして、今までそれをただ漫然と受け入れてきておりまして、デザインの統一感というものに欠けているという課題がございまして、量的にも質的にもこうしたものの改善が求められると思っております。また、解説板、サインであるからといって、その場所の景観の妨げになったり、場の雰囲気合わないものであってはだめだと思います。このため、これからは歴史観光にふさわしい質の高いデザインで統一されたインスタ映えする案内板やサインを各地に整備していきたいと思っております。例えば、ロンドンのピカデリー広場なんかに行きますと、かかしが手を広げているようなサインがあるわけですが、思わずそこに立って若い人がVサインをしながら写真を撮っているのを見たことがあるんですけども、そういうふうにしていただけるようなサインなどを作っていきたいというふうに思っております。解説するだけではなくて、地域の魅力として発信する明確なテーマ、そういったものをストーリー性をつけて、専門的な知識がなくても理解しやすい内容で、子どもや外国人を始めとして歴史好きでない人も楽しく歴史文化を体験できるような整備を図っていきたいというふうに思っております。今、外国人ということを言いましたけれども、最低でも日本語だけでなく、英語、中国語、韓国語、ポルトガル語くらいのを併設するようなものでないと、なかなか観光市としてやっていくのは厳しいと思います。

この他、神輿や山車がまちなかを練り歩くお祭りというのは、道路や商店街を一時的に独占しまして、公共空間の利活用の可能性を広げているお手本でありまして、たくさんのノウハウがそこに詰まっていると思います。東海道の整備は、こうしたものを踏まえたものにしたいというふうに考えております。

また、歴史観光の案内におきましては、それぞれの歴史資産の魅力や価値を、わかりやすく面白いストーリーとして繋いで語っていくことのできる観光案内人の役割ということが大変大切でございまして、こうした人たちをぜひ育て上げていきたいと思っております。

先ほどの活動紹介にもありましたけれども、本市には本当に多くのお祭りが地域の皆さま方によって受け継がれているわけでありまして、こんなにも魅力的なお祭りが市内各地にあることをもっと多くの市民に知っていただきたいと思っております。そして、うまくいっている観光地はどこもそうありますけれども、市民の一人ひとりが自分の地元のことをよく知って、自らが観光案内人の一人であるという意識とプライドを持ていただくこと、ひいてはそうしたことが観光産業都市としての岡崎に繋がっていくのではないかと、このように思っております。市民の皆さま方には、一層のご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。



瀬口先生

ありがとうございました。岡崎はものづくりのまちだということで、豊田や刈谷等も近接しておりますので、産業が非常に盛んでございますが、先ほどの紹介にありましたように、頼朝以来の鎌倉、室町の建造物とか、そういう歴史文化を継承しているということなので、新しい産業の柱として観光というものを今までの受け身から少し前向きに育てていきたいということだったと思います。そのためには、ストーリー性を持たせた周遊ということを考えて、東海道であれば東海道の、今日紹介していただいた祭りをテーマにするということもあるかもしれませんし、今博物館だとか、秋葉さんというのもやっていました。そういうもののテーマで街道の文化を切って出るとということもあるかと思います。

それから一方で、おいしい食べ物。東海道、^{やじ}弥次さん^{きた}喜多さんが何を食べたかくらいのは、岡崎の人だったら、私も岡崎の人間ですけどすぐ言えないということはあるかもしれませんが。それから新しい食べ物を作っていくんだということで、今は各地でそういう試みはなされているので、ぜひやっていただきたい。

それから、ハードの整備ですね。ソフトだけではなくて、そうすると駐車場も必要だと。先ほどの藤川の津島神社でも、あそこは駐車場がありますけど祭りのときにどうなってるかなとか、そういうものを踏まえて施設の計画を考えて大勢の人に提供していただくというのもきめの細かい対応かなということだと思います。

あっという間に時間が経ってきておりますが、最後に、後藤先生から、歴史文化資産を活かした地域活性化と観光振興に関する事例と、最後に岡崎市へのご助言があればお願いしたいと思います。

後藤先生

では簡単に。常識を疑ってみることが大事で、観光が振興すると地域が活性化するのはもう当然なんですけれども、その常識を逆に、ちゃんと調べると、観光が振興しているところというのは、先に市民の活動があって、そこでちゃんと楽しくやっていたり、楽しそうに見える活動があるから観光が振興して、それがさらに地域の元気を生むということなので、そういう意味では今日私が紹介したのは歴史的建造物を拠点とした市民の何となく楽しそうなわいわいとした活動ですけども、お祭りもきっとそういう一つなんだろうと思うんですね。お祭りやっている人が楽しそうというか、あそこに入ったら楽しそうだなと見えないとみんな帰ってこないの、例えば今日、演じてもらいましたが、皆さん壇上で地団駄踏んでましたけど、私もあそこの中に入って地団駄踏みたいなどという感じになると、きっとお祭りって楽しくなって、そうするとそこに観光が振興して地域が元気になって、さらにいい循環が生まれるということです。そういうまちは、お年寄りや子どもが本当に楽しく暮らせるというそういうまちになるんですね。自治体の経営の話でいうと、何かというと医療費で病院を充実しろ、待機児童施設を何とかしろという話があるんですけども、いやいやまちなかに楽しそうどころがいっぱいあって、例えば私の知っている自治体が歴史的なまちなみの中に空き家の再整備と一緒にそこで老人が集えて、働いている人たちが子どもを預けられる、老人たちに預けられるような施設を作ったら、ものすごくそこが元気の源になっていてうまくいってたりする。まちなみの整備にもいいし、実はおじいちゃん、おばあちゃんたちは病院に集まらないで、まちなみに集まって観光の相手してくれていたら、観光にもいいし、医療費負担も減るという。病院に集まっちゃうとすごい医療費負担になってしまいますから、そういうことがあります。まちが元気だったら、みんなそんな特

別な施設に行かなくてもまちで時間をつぶしてくれる、そっちで集まろうとなってくれる、それが本当のコンパクトシティかなというふうに思います。

そういう意味では、岡崎は羨^{うらや}ましいところで、結構いろんな祭りがあって、歴史的建造物、拠点になりそうなものがいっぱいあって、他のまちにない羨ましいものがたくさんあるので、ぜひそちらのところを活かしてほしいと思います。

最後に、川越。皆さんよく知っていて、川越って歴史的まちなみで観光になっているから地域が元気だと思われるかもしれませんが、あのまちなみを保存する決断の前に、市民が20年くらいずっと議論して歴史的なまちなみを活かした方向にハンドルを切ったから観光があって地域振興ができていますので、決して何もなくて最初に行政が観光振興のためにあそこに投資してくれたわけではありませんから、そういう意味では市民の活動というのは大事なんです。その点でも今チャンスがあるのは、川越がやっている頃は、国は何もそんなことに見向きもしてくれなかったもので、十数年も議論に時間がかかりましたけれども、今政府は先ほども言ったように、観光を通じた地域振興をやろうと官房長官、国が言い始めてくれているので、そこにハンドルを切った自治体は川越よりもずっと短い時間でそれを達成することができるんじゃないかなと思いますので、本当にぜひ岡崎市、また来てみたいと思いますけれども、ぜひそういう方向で頑張っていただければなということで、私からの簡単なエールとさせていただきます。

瀬口先生

エールをいただきました。住民の活動というものが非常に重要で、行政は観光ということをしかりイメージしてほしいんですけど、住民のスタンスからいうと観光ということじゃなくて生活の方、あるいは住民の活動というところからスタートして、それが文化だとかいろんなものに繋がっていく。それからもう一つはコミュニティ、つまり活動していくことによって顔見知りになる。特に東海道の今日紹介があったようなまちは、非常にいいなと思うんですね。道幅が狭いところですよ。国道1号を走って行って、人の顔はほとんどわからないですね。どちらかというとみんな怒った顔をして車を運転しています。ところが、こういう本宿、藤川とか矢作なんかを見てますと、皆さん怒った顔をしていないです。それから顔がわかる。顔の大きさがわかる。この人はどういう人か、名前とかそういうことを知らなくても、顔の記憶が残るくらいの距離なんですね。これはコミュニティをつくる上では非常に重要だと思います。それで人が歩けるので、健康になるわけです。私も若い時にいろんなところ調査して行って、お寺さんなんかに行くと、地域の高齢者が陽だまりに座ってずっとお話をしているんです。そういった広場とか空間は、神社の境内とかお寺の境内があるというのは、今は行政がきちっと作りすぎているので施設がありますけど、もともとは皆さんがそこに行って近所の人にちょっと声を掛けたり、子どもたちが境内を通って帰っていたんだと思うんですね。そういうものが、やろうと思えばできる空間があるということだと思うので、歴史的建造物、それから人々のコミュニティの既にあるグループとか、そういうものを活かしながら。それから最近テレビを見ておりましたら、私もちょっと年を取ってきましたので、骨に刺激を与えると非常にいいそうですよ。つまり骨というのは3~4年で生まれ変わる、再生するらしくて、そうすると、先ほどの矢作神社もそうですし、本宿もそうです、藤川も山中もそうですけど、みんな階段の上とか坂の上にあるわけですよ。そこをちょっと骨に刺激を与えるつもりで階段を上って歩いたり坂道を登っていただくと、50%の人が痴呆にはならないというデータがあるそうですので、それはなかなかいいなというふうに感心してテレビを見

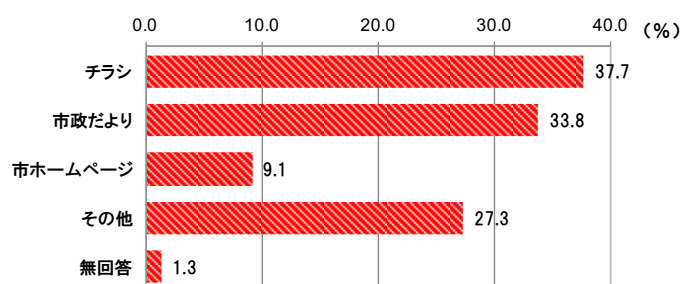
ておりました。そういうことですね、いいものずくめだと思うんです。これはやっぱり、地域の皆さまと行政が相談をしながら、あるいは全部行政に頼ってしまうとだめになるので、全部民間でやれと言われてもお金がない場合もあるし、仕事で忙しい場合もあるので、うまく連携しながら、まずは生活からスタートして、それが活動としてどんどん大きくなって、場合によってはそれが事業化になっていくというパターンでいかなくても、それは地域の資産として大切にしていけるということが大切なので、長期的な視点をそこに入れなければいけないし、発想の転換というか、長期的な視点を持つということは発想の転換もしなければいけない。あまり短期的に考えて、すぐ成果がでなければやめちゃうというのでは老舗にはならない。

そういうことで、今日は、岡崎の活力を東海道の歴史文化資産を使いながら全部やれそうな雰囲気になったんじゃないかと思いますので、今日発表していただきました地域の祭りの方々、パネリスト、市長さんに感謝しながら、時間が5分オーバーしましたがけれども、このシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

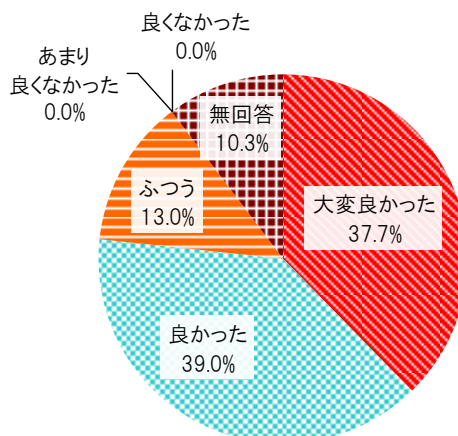
アンケート集計結果

シンポジウムには、172 名の方にご参加いただきました。その際実施されたアンケートには、68 名の方にご協力をいただき、歴史まちづくりに関するご意見をいただきました。

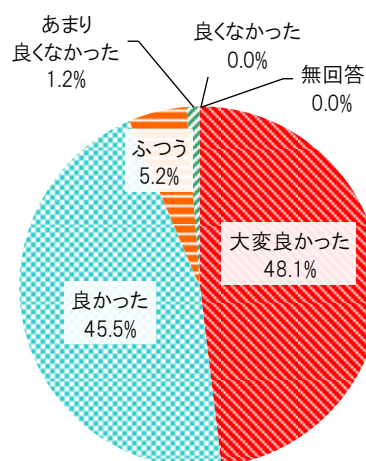
Q1 今回のシンポジウムを何によってお知りになりましたか？（〇はいくつでも）



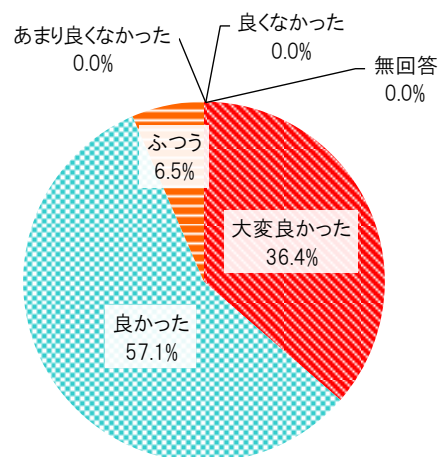
Q2 今回のシンポジウム全体の内容はいかがでしたか？（〇は1つ）



Q3 山中八幡宮デンデンガッサリ保存会によるオープニングはいかがでしたか？（〇は1つ）

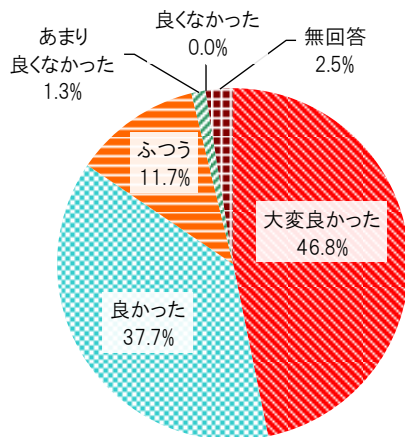


Q4 活動団体による活動紹介はいかがでしたか？（〇は1つ）



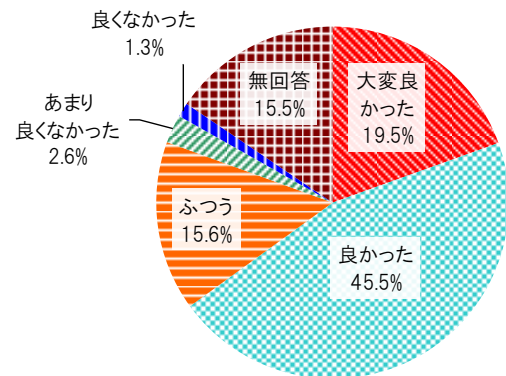
Q5

後藤 治氏による基調講演はいかがでしたか？（○は1つ）



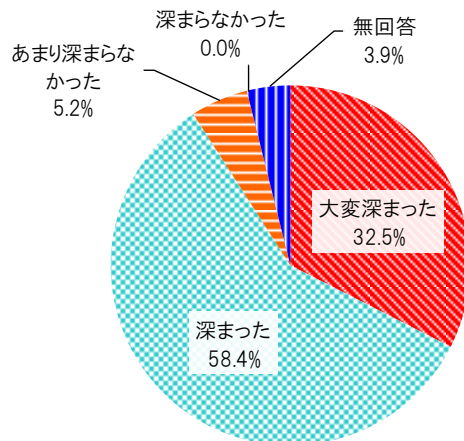
Q6

パネルディスカッションはいかがでしたか？（○は1つ）



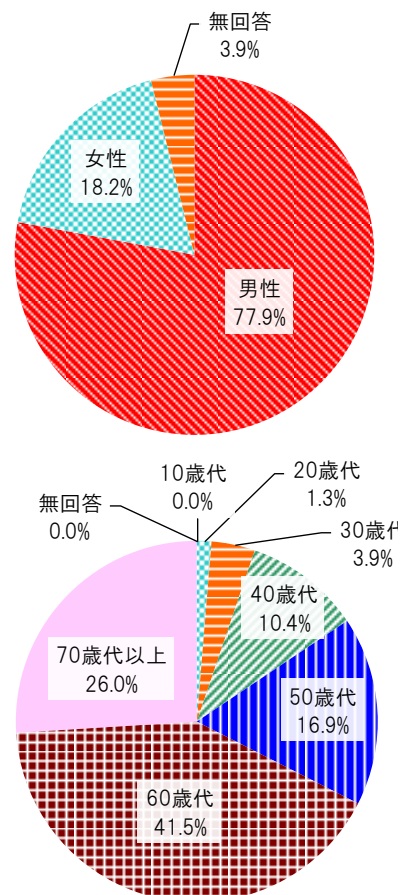
Q7

本日のシンポジウムで歴史まちづくりへの関心や理解は深まりましたか？（○は1つ）



Q8

あなたの性別、年齢層についてお聞かせください。（○はそれぞれに1つ）



【ハード面への意見】

- ・岡崎は武家屋敷などの歴史的建造物が残っていないのが残念。徳川家や三河武士ゆかりの寺社仏閣などを観光客の受入れができるよう整備できるとよい。
- ・史蹟さんぽ道を作成し、又、車のパーキングも確保する。
- ・康生地区でやっているリノベーションまちづくりを他の地域でもやってほしい。(山間部、南北西部地域) 岡崎は歴史が古い町なので、建造物を活用できると尚良い。

【ソフト面への意見】

- ・フォトコンテスト、写生会、ガイドツアー。
- ・次世代への継承が課題なので、若い世代の参加があると良い。たとえば、若い世代向けのイベント、広報の方法、お祭りツアー。
- ・少ない人員で担う手法も必要では。
- ・旅行業界等への働き掛け方について。
- ・実際への応用に問題があります。言葉では分かりますが、具体的にどう展開するかです。
- ・魅力を出すために、あまり限定的、固執的にならないよう、柔軟な考えを持って関わってほしいと思う。
- ・歴史まちづくりに必要な歴史文化資産のリストと行政としての活用方針を明確に示してほしい。
- ・歴史建物等保全の支援金制度をもっとPRしてほしい。
- ・歴史文化遺産は近世(江戸時代中心)だけでなく、中世、特に近代遺産も同時に評価しないと岡崎が見えてこない。今後建造物を中心とした町並調査をし、近世から近代の重層した町並を見出したい。
- ・岡崎市は資源が多すぎて何から手を付けてよいか手をこまねいている状況か。寺の数が全国1位、石工産業も全国有数、和ろうそく屋さんが2〜3店有り、となると、例えば公共墓地を作り、全国から墓を建立する人を募集して、墓石を市が助成金を出すとか。花火も昔は岡崎の独占であったとか、なぜ長岡や茨城県が有名になったのか。
- ・ストーリー性とか利用を見直す提言

【シンポジウムの感想】

- ・後藤氏講演は大変ノーマルな健康的な教示、“観光”ありきより、先ず何が大切かを気付かせて頂いた思いでした。Very good! パネルディスカッションは、パネラー3方、熱情ある発言、今後の展開に期待と注目!
- ・デンデンガッサリの演技が大変よかった。ずっと残っているものはすばらしい。
- ・どこにでもある町から歴史まちづくりの大事さが理解できた。豊かな暮らし、生活環境が良い…すばらしい。

- ・ 祭りは知っていたが、見に行ったことが無かったので、良い機会であった。歴史まちづくりの必要性がわかった。
- ・ デンデンガッサリをはじめ、いくつかの伝統行事が今に継承されていることがわかり勉強になった。
- ・ 他の都市から引越し岡崎市民となりました。歴史文化がびっくりするほど残されていて驚きました。少しでも少しずつ関わって意味をもって生活したいと思います。
- ・ なんとなくパネルディスカッションはまとまっているようでまとまってないというか、消化不良気味。
- ・ 後藤教授の講演はわかりやすく、すばらしかったですが、これを実行できる部署は岡崎市役所の中にあるんですか？

参考資料

次頁より、シンポジウムで配布された資料の一部を掲載します。

1. 活動紹介資料
2. 後藤先生基調講演資料
3. 歴まちカードチラシ